

脱現実化的現実化の徹底化としての フッサールの後期思想の展開

堀 栄 造

本稿は、フッサールの後期思想全体に渡る巨大な潮流の透徹した把捉を可能にするような透明な視点を明示しようとするものである。その視点とは、フッサールの後期思想の展開を脱現実化的現実化の徹底化として見る視点である。この視点は、同時に、『イデー』から後期思想への展開を、還元思想の思考形態としての脱現実化的現実化の変容と見ることがを合意している。したがって、この視点は、『イデー』と後期思想との同一性と差異性、並びに前者から後者への転換の必然性を、明快なものにしてくれるはずである。

第一節 脱現実化的現実化としての還元

1913年の『イデー』におけるデカルト的道の欠陥を克服し、超越論的現象学へと至る新たな確固たる道を究明することが、1920年頃以降のフッサールの後期思想の中心課題なのであった。それゆえ、フッサールは、その課題を解決すべく、1919-20年頃から「実証的存在論を介しての道」を採り、あるいは1921年頃から「実証科学の批判を介しての道」を採ったのであるが、それらは1923年頃からの「心理学を介しての道」と合流しつつ、非デカルト的道としての進展の方向へと巨大な潮流を成したのである。その巨大な潮流は、世界問題を主要な主題として内含し、「生」、「経験」、「生活世界」などの諸概念を産み出し、遂には、それらの集大成としての『危機書』において究極的な形態を獲得するのである。

ところで、そのような後期思想全体に渡る巨大な潮流の透徹した把捉を、いかなる視点から為しうるのか。その巨大な潮流の透徹した把捉を可能にするような透明な視点を得ようと敢えて挑む際に、大いなる指針を与えてくれるものがある。それは、フェルディナント＝フェルマンの『現象学と表現主義』⁽¹⁾という著作である。

フェルマンは、その著作の裏表紙での自らの内容紹介において、次のように述べている。

すなわち、この学際的な研究において、私は、1913年の『イデー』において全盛を
きわめるエドムント＝フッサールの現象学の観念論と、文学上の表現主義とを、共通の思
考形態に帰せしめようと試みる。その共通の思考形態とは、精神的かつ社会史的問題状
況への応答として、第一次大戦直前の時代の現実性の概念を形づくった「脱現実化的現実
化」という弁証法的形象である。フッサールの現象学的還元の学説は、この現実性の概念
を哲学的方法論へと翻訳している。その事を証示するために、私は、フッサールの思考を、
最広義の表現主義的作家たち — フーゲー＝フォン＝ホフマンスタール、ロベルト＝ムー
ジル、カジミール＝エートシュミット、ヴィルヘルム＝ヴォリンガー、マックス＝ヒカー
ト、カール＝バルトラ — の思考と結び付けている、構造上の親縁性を跡づける。最後
に、私の思考形態分析は、それを以て現象学が終局的に20世紀のもう一つの大きな精神
的運動つまりゾークムント＝フロイトの精神分析に接近することになった、還元の形態変
容を追跡する、と。⁽²⁾フェルマン自らが主張する通り、この著作の画期的な特質は、フッ
サールの現象学の観念論と文学上の表現主義とを、共通の思考形態に帰一させようとい
う試みにある。文学上の表現主義は、19世紀の清算へ向けて歩み出したドイツにおける一
連の偉大な精神的運動における先駆けを務めた⁽³⁾のであり、それは「現実性」という概
念を高めようとする欲求⁽⁴⁾に動機づけられている。それに関して、フェルマンは次のよう
に述べている。すなわち、現実性の概念を高めることの必要性は、20世紀初頭に新生ド
イツ帝国の社会的および経済的發展と結び付けられた、新時代を画する疎外の経験から生
じてくる。自然科学的な算定可能性によって定義された、空虚で危機に対してひ弱だと感
じられる現実性に面して、そのうちに再び「全人」が顧慮されうるような真正な世界関係
への憧憬が生じてきたのである。「真の現実性」という言葉は、そのうちに主体が無傷の
ままで再び見出されうるような、疎外なしに人間によって産み出される世界という夢を反
映している。現実性の概念を高めることにおいて、19世紀の「現実感覚」と20世紀の
「ユートピアの精神」とが、全く特有な同盟を結ぶのである。こうして、「現実性」は、
ドイツにおける戦前（第一次大戦前）の世代の諸々の希望と不安とを表現する一つの生の
概念になるのである、と。⁽⁵⁾つまり、20世紀初頭のドイツにあっては、自然科学的実証
性に支えられた19世紀の現実感覚が揺らぎ、そうした疎外を克服しようとするところに、
生の概念としての現実性の概念が形成されたのである。したがって、表現主義は、崩壊せ
んとする「自然科学的な現実性」に取って代わって、「真なる現実性」を産み出したもの
と言える。その「真なる現実性」に関して、フェルマンは次のように指摘している。すな

わち、「真の現実性」という生の概念の背後には、ゲオルク＝ミッシュが1930年の彼の著作『生の哲学と現象学』において「脱現実化的現実化 [entwirklichende Realisierung]」と呼んだような一つの思考形態が隠されているのである、と。⁽⁶⁾ 脱現実化的現実化とは、つまり、それまで素朴に受け入れられてきた現実性を脱することによって、新たに真の現実性が見出されるということであり、それはまさに、フェルマンによれば、現実性の概念を高めるという欲求に動機づけられた表現主義の思考形態なのである。そして、フェルマンは、この脱現実化的現実化という思考形態を、フッサールの現象学的還元にも該当するものとみなすのである。そこで、フェルマンは次のように述べている。すなわち、還元は、つまり、フッサールが還元論を仕上げている時代の現実性の概念を説明する。美術や音楽の領域をも越えて広がるドイツ表現主義の「運動」が、指し示されているのである、と。⁽⁷⁾ つまり、フェルマンは、フッサールの現象学的還元の思想が、表現主義の運動による影響を受けながら、脱現実化的現実化という思考形態を採って成立するものと見ているのである。

現象学的還元を、表現主義的思考形態として捉える⁽⁸⁾ フェルマンは、還元を、表現主義的な現実概念を説明するような一つの思考形態たらしめている契機⁽⁹⁾ として、次の三つの契機を挙げている。第一の契機は、現実性の遮断⁽¹⁰⁾ であり、第二の契機は、還元の非論証的性格⁽¹¹⁾ であり、第三の契機は、世界に対する主観の不安定な立場⁽¹²⁾ である。フェルマンの主張するように、現象学的還元が表現主義的な現実概念を説明する一つの思考形態であるとすれば、ここに挙げられた三つの契機は、表現主義によっても共有されるものであろう。そこで、おのおのの契機に即して、現象学と表現主義とを比較的に検討してみると、次のようになるであろう。つまり、第一の契機は、現象学から見れば現象学的エゴケーを、表現主義から見れば現実喪失の形式を、それぞれ指示するものであろう。また、第二の契機は、現象学から見れば本質直観および本質記述を、表現主義から見れば事態の純粋な記述を、それぞれ指示するものであろう。さらに、第三の契機は、現象学から見れば現象学的反省における自由な想像変様を、表現主義から見れば否定的な実在経験を、それぞれ指示するものであろう。このように、なるほど、現象学と表現主義とは、共通の思考形態を採るものと見ることができよう。

現象学と表現主義とに共通のこのような思考形態は、フッサールの還元思想を理解する上で助けになるとともに、実は、フッサールの後期思想全体に渡る巨大な潮流の透徹した把握を可能にするような透明な視点を得ようとする上でも、大いに役立つものとなるにち

がない。それゆえ、先ず以て、フッサールの還元思想を理解すべく、還元の思考形態と表現主義の思考形態とのさらに詳細な照合へと移らねばならぬのであるが、フェルマンは、『イデー』における還元と表現主義とが、共通の思考形態を有するとみなしているのだから、『イデー』における還元についての考察から始めなければならない。

『イデー』において言明されているように、現象学的方法は、徹底して反省の諸作用の中で展開される⁽¹³⁾のであるから、還元を方法的操作として具体的に理解することをめざそうとすれば、還元が具体的に遂行される場としての現象学的反省の場が、焦点となろう。そして、現象学的反省の場での具体的な操作を担うのは、何と言っても「想像」であろう。したがって、フッサールも、本質探究の自由は必然的に想像における操作を要求する⁽¹⁴⁾と言っている。さらに、フッサールは次のようにも述べている。すなわち、現象学においては、すべての形相的学においてと同様に、準現前化が、もっと正確に言えば、自由な想像が、知覚に対して或る優位を獲得するのである、と。⁽¹⁵⁾このように、還元の具体的な遂行は、準現前化ないし想像に依拠しているのであるが、それというのも、フッサールによれば、直接的で直観的な本質把握は範例的な個別態の単なる準現前化に基づいて遂行されうる⁽¹⁶⁾からである。還元におけるこうした想像の優位は、そのまま表現主義にも該当する。つまり、フェルマンは、19世紀のリアリズムの「現実感覚」を風刺して「可能性感覚」⁽¹⁷⁾なるものを考案した、表現主義的作家の一人であるロベルト＝ムーヅルに言及しつつ、次のように述べているのである。すなわち、可能的なものは、無拘束な思考可能性として定義されるのではなく、この可能的なものには、現実的なものという概念を変えるような、現実的なものに対する存在論的優位が、認められるのである、と。⁽¹⁸⁾ここで、現実性に対置された可能性を、想像と同義だとみなすならば、まさに表現主義においても、想像の優位が承認されるものと言える。実際、フェルマンも次のように述べているのである。すなわち、「可能性感覚」についてのムーヅルの諸省察は、現実性に対する優位を純粋な可能性に認める現象学的態度の、一つの説明のように読み取れる。勿論、現象学は、絶対的意識において与えられる純粋な諸可能性を、目的そのものとして考察するのではなく、一つの揺るがしがたい現実の合理化の手段として考察するのである。フッサールは、可能的なものの多様性のうちで、現実的なものの生起がそれに則るべき規則を探し求めているのである、と。⁽¹⁹⁾ここで、現象学的態度を、現実性に対する純粋な可能性の優位を認めるものとみなし、絶対的意識において与えられる純粋な諸可能性としての想像変様を、現実の合理化の手段とみなすフェルマンの洞察は、きわめて明快なものであり、

フッサールの還元思想を理解し易いものにする。つまり、現象学的還元とは、現実性に対する純粋な可能性の優位を認め、想像の駆使を介して現実を合理化し、現実性においては見えなかった真の現実性を開示する「脱現実化的現実化」なのである。(20)

表現主義が、否定的な実在経験を介して、それまで見えなかった真の現実性を見極めようとするのに対して、現象学的還元もまた、現象学的エポケーを介して、素朴に受けとられた現実を脱して、真の現実に至ろうとするものであると言えよう。現象学的還元における独特の操作も、結局のところ、真の現実を獲得せんがために素朴な現実を脱して、それを逆に照射しようとする企てなのである。そして、その場合、素朴な現実を脱すると言っても、勿論、素朴な現実から遊離してしまうというわけではなく(21)、むしろ素朴な現実から或る一定の距離を取ったところから、改めて、素朴さという覆いを剥ぎ取られた真の現実を眺めてみようというわけである。現実を脱しつつも現実から遊離してしまうのではないという、現象学的態度の両面的価値づけは、表現主義にも共通するものであり、フェルマンも次のように述べている。すなわち、表現主義的思考は、現実に対する特有の両面的価値づけを反映している。その思考は、既存のものを受け入れることもできないが、それから離れることもできないのである。それというのも、求められている新たな現実は、所与の現実の背後でのみ実現されうるからである、と。(22)

ところで、『イデー』におけるフッサールにとって、既存のものとしての現実とは、実在的世界としての自然的世界なのであり、求められる新たな現実とは、内在的世界としての純粋な意識領圏なのであった。それゆえ、『イデー』におけるフッサールは、先ず以て、「意識の領分つまり体験という存在領圏からの、自然的世界の原理的な分離可能性」(23)の意味の論究のみに傾注したのであった。勿論、ここで言われる、意識領圏からの自然的世界の原理的な分離とは、飽く迄も、脱現実化をめざす現象学的還元の方法上のものであり、意識領圏と世界そのものとの遊離をもくろむものではないはずである。(24)しかし、『イデー』においては、現象学的還元によって開示される体験構造の志向的相関者としての、つまり現象学的内実としての世界が、十全かつ具体的に主題化されているわけではないのである。つまり、現象学的還元によって開示されるものは、主として純粋体験なのであり、『イデー』の75節の表題「純粋体験の記述的本質論としての現象学」(25)は、その事を象徴するかのようである。したがって、現象学的還元を純粋体験への還元として遂行する『イデー』における還元は、現象学的内実としての世界を欠いた不十全なものであり、体験内在主義一辺倒という謗りを免れない。フッサール自身も、カール＝シュー

マンがDと呼ぶフッサールの手摺本、つまり1922年刊の『イデー』第二版の手摺本の欄外注記で、75節の表題に対して、「これはあまりに偏狭すぎる」⁽²⁶⁾と述べている。1920年代におけるフッサールにしてみれば、現象学的内実としての世界を主題化しない還元などというものを目の当りにすることは、脱現実化的現実化の不徹底をまざまざと見た思いだったのであろう。

かくして、1913年の『イデー』における還元は、専ら「現象学的残余」⁽²⁷⁾としての純粹体験への内在化を唱え、世界的な内実の還元を欠いているのであるが、この点に、『イデー』で採られた道がデカルト的道と呼ばれる本質的理由があり、また、その道が欠陥を有するとみなされる根本的理由がある。したがって、十全な現象学的還元とは、世界的内実の還元を内含した普遍的還元のことであり、そのような還元こそが、徹底した脱現実化的現実化を可能にするものに他ならない。それゆえ、デカルト的道の欠陥を自覚したフッサールは、先ず以て、必然的に、素朴な現実としての自然的世界そのものを現象学的研究の主題圏に内含するようになるのである。フッサールが、1920年代前半において、実証的存在論や実証科学の批判から出発しようとしたことは、換言すれば、自然的世界を遡る諸問題から出発しようとしたことは、フッサールが脱現実化的現実化を徹底化することに着手したことを証示するものである。したがって、『イデー』の段階では、「脱現実化」に重点が置かれて、「脱現実化的現実化」が不十全なものに終わったのに対し、1920年頃からの後期思想においては、「脱現実化」を経た後の「真の現実の現実化」に重点が置かれて、「脱現実化的現実化の徹底化」が図られたものと見ることができよう。

第二節 脱現実化的現実化の徹底化

『イデー』における還元に比して、1920年頃からの後期思想における還元が変容を遂げたことは、フッサールの後期思想全体に渡る巨大な潮流を透徹した把握の下に置く上での鍵となる。

フェルマンは、『イデー』に比しての、後期著作におけるフッサールの現象学の転換を、「本質学」から「現実学」への展開として捉え⁽²⁸⁾、その転換について次のように述べている。すなわち、この転換は、本質的な現実性への信仰の崩壊によって特徴づけられるような、戦後（第一次大戦後）の精神的な気分の変化を反映してもいる。戦争とそれに

結び付く政治的不安定はもとより、インフレーションの経験が、実体主義の解消を新時代を画する経験たらしめたのである、と。⁽²⁸⁾このように、フッサールの現象学の転換を、戦後の時代精神の反映として捉えたフェルマンは、さらに次のように述べている。すなわち、フッサールは、還元という思考形態の変更された自己了解によって、戦後の変化した精神的状況に対処したのである。還元は、あらゆる現実を包摂し、現実の経験を不必要に見えるようにするような純粹本質の領域への直接的な道としての自らの栄光を失う。還元は、さらに一層、現実の経験から連れ出す逃げ道に見えてくるのである、と。⁽³⁰⁾フェルマンが指摘するように、フッサールの後期の転換が、実体主義の解消を経験した戦後の時代精神による影響を受けたにせよ、フッサールの後期の転換を単に本質学から現実学への展開として処理することに対しては、異論が唱えられるべきであるように思われる。なぜなら、『イデー』が本質学という性格を有するにせよ、それは何も現実学と対立的に相互に排斥するような関係にはないからである。それゆえ、フッサールは、『イデー』の付録38（1929年秋）で、1913年の『イデー』の叙述の不完全さを補うべく、次のように述べている。すなわち、絶対的ないし超越論的主観性の領域は、或る特殊な全く無類の仕方、実在的な全世界を、あるいは、すべての可能的な実在的世界およびあらゆる拡張された意味のすべての世界を、「自らのうちに担う」のであり、つまり、現実的および可能的な「志向的構成」によって自らのうちに担うのである、と。⁽³¹⁾単純化して言えば、意識が自然的現実を志向的に担うわけであるから、自然的現実は何らかの形で意識とともに還元に含まれなければならないはずである。それゆえ、意識の本質学は、自然的現実の本質を問う現実学と対立的に相互に排斥するどころか、そもそも自然的現実の脱現実化的現実化に動機づけられていたはずなのであり、真の意味での現実学たらんとしていたはずなのである。但し、『イデー』の段階のフッサールは、自然的次元から超越論的次元への移行に性急なあまり、その還元は脱現実化に重点を置き、その結果、体験内在主義一辺倒による世界的内実の還元の欠落は免れ難く、その本質学がその限りでのみ十全な現実学たりえないというのであれば、納得のゆくところである。したがって、フッサールの後期の転換は、フェルマンの言うような、本質学からそれと対立的に相互に排斥する現実学への単なる展開なのではなく、体験内在主義一辺倒による脱現実化的現実化の不全さからその十全化へ向けての修正として理解されねばならない。

フッサールの現象学的還元と表現主義とが脱現実化的現実化という共通の思考形態に帰一することを証示してみせたフェルマンの功績は、どれほど賞賛しても余りあるほどだが、

還元思想の変容の解釈の点では、誤謬を犯しているものと言えよう。なるほどフェルマンの言うように、フッサールは、還元という思考形態の自己了解を変えはしたのだが、フェルマンは、還元についてのフッサールの自己了解の変更を見誤っているのであり、還元が現実を経験することから逃れる逃げ道としか思えないようになるといった、フェルマンの主張は、断じて的を射てはいない。フッサールの還元思想は、その不十全性への反省によって、後期において世界的内実の還元を内含することにより、現実の経験から逃れるどころか、むしろ現実の経験の本質のうちへと穿ち入ったのである。つまり、体験内在主義から現実の経験の本質解明へのこうした転換は、『イデー』においては「体験」という述語が専ら用いられていたのに対し、後期においては「経験」という述語がそれに取って代わるという事実によって、何よりも明瞭に証示される。

フッサールの後期思想が、現実学と呼ばれうるとしても、それはフェルマンの言う現実学ではない。還元思想の変容を解釈する上でのフェルマンの誤謬の根本要因は、実は、現実学概念に関するフェルマンの誤解なのである。フェルマンが、『イデー』における本質学と対立的に相互に排斥するものとして掲げる後期における現実学は、解釈学的性格を有するものとして考えられている⁽³²⁾が、現象学的還元は、想像に支えられた脱現実化的現実化の手法として後期においても一貫しているものであり、またそうでなければ、『危機書』に至って最高潮に達する超越論的現象学は、そもそも存在しえないことになろう。

フェルマンは、還元における具体的操作としての想像の意義を誤解し、『イデー』における想像を単に想像変様の機能を果たすものと見て、本質観取の手段にすぎぬもののごとくに考えている。それゆえ、フェルマンは、『イデー』における還元を想像の弁証法として特質づけ、後期思想における還元を想像の弁証法に取って代わった解釈学的手法として特質づけて、「主観の諸能作の解釈学による想像の弁証法の代用」⁽³³⁾などと言うのである。しかし、還元における具体的操作としての想像は、想像変様の機能に尽きるものではない。想像は、還元の具体的操作の基底を成しながら、その意義は、そもそも脱現実化の手段という点にあったはずであり、しかも、その脱現実化は、現実化からの遊離を拒むものであったはずである。『イデー』における還元の際の想像も、決して、現実から遊離して閉じた想像的領圏を築くものではないはずであり、そしてまた、想像を具体的操作の基底とするそうした還元は、後期思想にも継承されるのであり、現象学的反省における具体的な操作を可能にする想像に関する具体的な叙述は、『第一哲学』や『現象学的心理学』においても見受けられるところである。還元の際の想像は、そもそも、素朴な現

実と或る一定の距離を取り、眞の現実をあるがままに見ることを主眼とするものである。後期において、世界的内実が還元には含まれることになるのであるが、世界的内実の還元を支えるものは、まさに、生と世界との結び付きにおいて成立する具体的な生の能作を、ありのままに準現前化する想像の働きに他ならない。想像とは、何も現実から遊離したものを勝手気ままに思い浮かべるということではなく、素朴な現実を眞の現実へと転換する橋渡しの働きに他ならない。こうした想像なくしては、本来的に、還元は成立しえないのであり、脱現実化的現実化は、遂行されえないのである。フッサールの後期思想が、フェルマンの眼には「自然的世界観の解釈学」⁽³⁴⁾と映ったとしても、フッサールの後期思想の根底には脱現実化的現実化としての還元の思想が貫かれているのであり、しかも、それは脱現実化的現実化の徹底化という形で貫かれているのである。

フェルマンが鋭利に分析してみせたように、フッサールは、第一次大戦前後の時代精神の影響を受けながら、脱現実化的現実化という思考形態を骨格として現象学的還元を着想したのであり、1920年頃以降の後期は、脱現実化的現実化の徹底化をめざす飽くなき努力の過程であったとすることができる。『イデー』の段階では、脱現実化に傾倒するあまり、現象学的還元は、体験内在主義一辺倒による世界的内実の還元の欠如という結果を招いたが、後期においては、還元思想の成熟に裏打ちされた、脱現実化としての還元の手法の定着によって、もはや還元の際の実在的世界への逆戻りというメタバシスへのフッサールの強い危惧は緩和するとともに、フッサールは、実在的世界としての素朴な現実を現象学的研究の主題圏のうちに入れるほどの度量を身につけて、脱現実化的現実化の徹底化に取り組んだのである。つまり、後期においては、素朴な現実における世界的内実を度外視することなく、世界的内実の還元をも内含する現象学的還元を企図したのである。そして、そうした企図は、現象学的還元を十全で具体的なものにすることへと導き、『イデー』では中途半端になっていた「眞の現実化」の普遍的遂行を可能にし、「脱現実化的現実化の徹底化」を促したのである。

結語

「脱現実化的現実化の徹底化」を図ろうとしたところに見えてきた「眞に現実的なもの」つまり、素朴な現実から最も遠くにあるはずのものは、実は、最も近くにあるもの、つまり、「生」、「経験」、「生活世界」といった最も十全で具体的なものだったのである。

「脱現実化的現実化の徹底化」として遂行された後期の新たな道は、『イデーン』における「脱現実化」へ向けてのベクトルを転回させて、今度はそのベクトルを「真の現実の現実化」へと向かわしめ、その途上において生み落とされた生活世界概念を育みながら、究極的に、自らの核心部となしたのである。それゆえ、フッサールの後期における生活世界概念は、脱現実化的現実化の徹底化をめざす巨大な潮流の究極点に位置して、その潮流を最高潮に至らしめて終始符を打つことを課せられた申し子であるものと言えよう。

【注】

- (1) Ferdinand Fellmann: *Phänomenologie und Expressionismus*, Karl Alber, Freiburg /München 1982.
- (2) 上掲書 裏表紙参照。
- (3) *ibid.* s.49.
- (4) *ibid.* s.45.
- (5) *ibid.* s.46.
- (6) *ibid.* s.55.
- (7) *ibid.* s.48.
- (8) *ibid.* Vgl. s.84 §8. Die phänomenologische Reduktion als expressionistische Denkform.
- (9) *ibid.* s.87.
- (10) *ibid.* s.87.
- (11) *ibid.* s.93.
- (12) *ibid.* s.100.
- (13) Edmund Husserl: *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie*, *Husserliana* Bd.III/1, 1976, hrsg. von Karl Schuhmann, 1.Halbband, Text der 1.-3. Aufl., Martinus Nijhoff, Den Haag, s.162.
- (14) *ibid.* s.148.
- (15) *ibid.* s.147.

(16) *ibid.* s.145f.

(17) フェルマンは、この場合の「可能性感覚」について、次のように述べている。すなわち、結局、「可能性感覚」は、「可能性感覚とも呼びうるような現実感覚」、あるいは「たいていの人間のものである、人間の現実的な可能性に対する感覚」とは区別される「可能的な現実性に対する感覚」と、ものものしく言われるのである、と。(Ferdinand Fellmann : *Phänomenologie und Expressionismus*, s.80.)

(18) Ferdinand Fellmann : *Phänomenologie und Expressionismus*, s.79f.

(19) *ibid.* s.80f.

(20) フィンクは、現象学的還元について、次のように述べている。すなわち、現象学的還元は、そもそも単なる「遮断」という方法では全くなく、遡源 [*Zurückleitung*] という方法である。それは、自己省察の最も極端な徹底主義において哲学する主観を、それ自身を突破して、人間としてのその自己統覚によって隠蔽されていた、その妥当相関者が世界である超越論的信念生へと導くのである。別の言い方をすれば、それは、原理的に非一世界内部的な認識主題全般の、つまり世界根源の次元の発見および露呈の方法である、と。(Eugen Fink : *Die phänomenologische Philosophie Edmund Husserls in der gegenwärtigen Kritik 1933*, in: *Phänomenologica* 21, s.134.)

(21) フィンクは、現象学的還元における世界超越について、次のように述べている。すなわち、現象学的還元の遂行において生起する世界超越 [*Welt-Transzendieren*] は、世界から出て、世界から去って、世界から引き離された(関係によって結びつけられた)他のものとしての根源へと導くのではなく、世界の現象学的超越は、超越論的主観性の開示として、同時に、絶対的存在の露呈された総体への世界の留保である。世界は、絶対者に内在的に留まっており、あるいはむしろ、絶対者のうちに存するものとして見出される。それゆえ、現象学的還元において、世界そのものが超越されるのではなく、かの自然的態度の制約性が超越されるだけなのである、と。(Eugen Fink : *Die phänomenologische Philosophie Edmund Husserls in der gegenwärtigen Kritik 1933*, in: *Phänomenologica* 21 s.105.)

(22) Ferdinand Fellmann : *Phänomenologie und Expressionismus*, s.79f.

(23) *Husserliana* Bd.III/1 s.99.

(24) フィンクは、『イデー』における内在と超越の区別の意味について、次のように述べている。すなわち、フッサールは、『イデー』において、先ず第一に、方法上の保

証を予め獲得する、しかも、内在と超越との区別を志向性の区別として特色づけること
によってそうするという課題を、目前にしたのである。『イデー』におけるこうした
諸規定は、現象学的に究極的に妥当する、いわば定義上の概念規定としては断じて考え
られてはならない。内在的なものと超越的なものとのおのおのの所与性の志向的分析は、
それらの決定的な諸概念にとっての「基準」の告知では断じてなく、伝統的にそもそも
領域的に思念された区別の志向的区別への変換を、呈示するだけなのである、と。

(Eugen Fink : Die phänomenologische Philosophie Edmund Husserls in der gegen-
wärtigen Kritik 1933, in : Phänomenologica 21, s.128.)

(25) Husserliana Bd.III/1 s.156 §.75 Die Phänomenologie als deskriptive Wesens-
lehre der reinen Erlebnisse.

(26) Husserliana Bd.III/2 s.504.

(27) フィンクは、『イデー』において用いられる「領域」や「残余」という言葉につい
て、次のように述べている。すなわち、ひとは、意識の領域の優位性および分離可能性
についての『イデー』でなされた分析を、還元の世界内部的な開始から、出来上がった
透明な問題設定への、移行の運動性の中へと入れるときにのみ、フッサールが非一領
域的な超越論的主観性を「領域」および「残余」として言い表していることを、把握す
ることができるのである、と。(Eugen Fink : Die phänomenologische Philosophie
Edmund Husserls in der gegenwärtigen Kritik 1933, in : Phänomenologica 21
s.129.)

(28) Ferdinand Fellmann : Phänomenologie und Expressionismus, Vgl. s.107.

(29) ibid. s.107.

(30) ibid. s.109.

(31) Husserliana Bd.III/2 s.591.

(32) Ferdinand Fellmann : Phänomenologie und Expressionismus, Vgl. §.10 Gestalt-
wandel der Reduktion.

(33) ibid. s.118.

(34) ibid. s.117.